90. 腎疾患における 超音波検査の有用性について

大垣市民病院放射線技術部 ○吉田 宏 ・ 高木 等
Hiroshi Yoshida Hitoshi Takagi
木村得次 ・ 金森勇雄
Tokuji Kimura Isao Kanamori

(目的)

近年、腎疾患に対する超音波検査（以下、US）は装置の高性能化に伴い、その有用性が重視されてきている。今回、我々は、最近一年間での腎臓USスクリーニングにおける検査成績（び慢性腎疾患を除く）をまとめ、その有用性につき検討した。

(対象および方法)

対象は、昭和62年1月から12月までに当院にて腎臓USの施行された1524例であり、男性769例、女性755例、年齢は、0～89才、平均45.3才である。

腎臓USは、左右肋間走査、側腹部走査を基準に、腎の長軸、短軸像等を得ている。

使用装置は、東芝SSA-100A、SSA-90A、アロカSSD-650を用いた。

(結果)

腎臓USにて、US上、異常所見のみられた症例は695例（45.6%）と多く、その内訳は、水腎症273例（17.9%）、うち尿管結石の描出されたもの13例（4.8%）、腎嚢胞203例（13.3%）、腎結石197例（12.9%）、腎癌10例（0.7%）、生検後血腫7例（0.5%）、血管筋脂肪腫7例（0.5%）、外傷2例（0.1%）、周囲膿瘍1例（0.1%）であった。

（Fig. 1）腎癌および、血管筋脂肪腫に関して、手術あるいは、CT、血管造影法によって診断されたものは、腎癌8例、血管筋脂肪腫2例であり、腎臓USでの正診率は、各々、7/8（87.5%）、2/2（100%）であった。偽陰性1例は、左腎下極の4×3cmの小腎癌であった。（Table. 1, 2）

また、偽陽性例は、3例あり、3例とも左腎の腫瘍を疑ったものであり、うち2例は、CTにて、皮質の肥厚、馬蹄腎、残りの1例は、CT、血管造影法によっても不明の症例であった。

(考察)

腎腫瘍のUS像は、内部エコーが、腎実質とほぼ同一のものから、低エコーと高エコーの混在したものまで多種多様である。今回の自験例では、2例、皮質の変形、肥厚を腫瘍と見誤っている。また、偽陰性、偽陽性例は、すべて左腎であり、左腎は、消化管gasの影響を受けやすい点等、腎臓US施行時には、注意が必要であるものと思われた。

(結論)

腎臓USは、腎疾患に対するsensitivityが高く、患者への侵襲も少なく、スクリーニング検査法としてきわめて臨床的意義が高いものと思われた。

Fig. 1 U S Findings

Table 1

U S Findings of Renal Cell Carcinoma
(+ Nephroblastoma)
N = 8

Case	Age	Sex	Locali- zation	Size(cm)	Echopattern	Echo level
1	51	M	R	3.8 x 3.5	heterogeneous	mixed
2	76	M	L	4.0 x 3.0 (CTによる)	—	—
3	68	M	R	6.2 x 6.2	heterogeneous	iso ~ sl hyperechoic
4	54	M	L	6.4 x 4.0	heterogeneous	iso ~ sl. hyperechoic
5	5	F	R	6.6 x 5.6	heterogeneous	iso ~ sl. hyperechoic
6	54	M	R	8.9 x 7.9	heterogeneous	iso ~ sl. hyperechoic
7	63	F	L	9.5 x 6.7	heterogeneous	mixed
8	66	M	R	10.8 x 8.8	heterogeneous	mixed

sensitivity 7/8 (87.5%)

Table 2

U S Findings of Angiomyolipoma
N = 2

Case	Age	Sex	Locali- zation	Size(cm)	Echopattern	Echo level
1	32	F	R	1.1 x 1.0	homogeneous	hyperechoic
2	64	M	R	2.3 x 2.0	homogeneous	hyperechoic

sensitivity 2/2 (100%)